

ハドソン川の奇跡

もう10年も前になりますが、「ハドソン川の奇跡」として大きく報道された航空機事故をご記憶の方も多いと思います。ニューヨーク・マンハッタンの上空で、離陸直後の航空機にバードストライクが発生し全エンジンが停止。野鳥の一撃で一瞬にして危機に瀕した航空機は、機長の冷静な判断と沈着な行動によって、ハドソン川に不時着。一人の犠牲者も出さず、奇跡の生還を遂げた事故です。最先端技術の塊である航空機も、自然には無力でしたが、機能を失ってしまった航空機を操って奇跡の生還を果たしたのは、人間の経験と勇気でした。



ところで、この事故の後日談が、「ハドソン川の奇跡」という題名で映画化されました。事故の後に当局によって行われた事故調査の様を描いた実話です。ハドソン川への不時着というパイロットの判断が適切だったのか、むしろ近くの設備の整った空港へ引き返して着陸するという選択の方が、乗客の命を危険に晒すことにならなかったのではないか、という疑問です。空港へ引き返す決断をして旨く辿り着くことができなかつた場合には、市街地へ墜落、市民多数を巻き込む大惨事になった可能性があります。映画では、フライトシミュレータによって再現実験が行われ、空港へ引き返しても無事に着陸できることが示されました。奇跡の生還を成し遂げ絶賛された乗員達が一転窮地に立たされるのですが…。(結末は書きません、どうぞ映画で確かめて下さい。)

さて、もし自動運転システムがこのような状況に直面したら、どのような判断をするのでしょうか？このような究極の場面は極端かも知れませんが、ロボットやAIなど、これからますます高度に進化し自動化される機械にとっては、この種の問題に多かれ少なかれ直面せざるを得なくなります。こういった機械と、それを受入れ、利用する人間や社会とは、どのような関係にあるべきかという課題は、今まで以上に重大で切実な問題となってくるでしょう。これは、まさに当財団が設立時から一貫して掲げる「機械と人間の調和」というテーマに帰着するものだと思います。

この課題は技術論だけでは解決できません。法律、倫理、社会学など幅広い分野の専門家はもちろん一般市民を含めて多くの人々を議論に巻き込み社会的なコンセンサスを形成することが必要です。そのためには、技術者は自らの狭い専門分野に閉じこもるのではなく、異なる専門分野の人達や一般の人達にも問題の所在を判り易く説明し、議論を深め、協力しながら解決策を探っていく姿勢が必要です。このことを忘れずに、機械と人間が共に生きる社会に向けて、「機械と人間の調和」を追い求めていって欲しいものです。

御情報処理推進機構 顧問 松田 晃一 (理事)